



# 障害のある児童生徒との 交流及び共同学習等 実施状況調査結果

平成29年9月28日

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課

## 調査概要

- 調査時点：平成29年3月31日（平成28年度実績）
  
- 調査対象：公立の小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・中等教育学校  
（回答数）  
小学校（義務教育学校前期課程を含む） 19,547校  
中学校（義務教育学校後期課程・中等教育学校前期課程を含む） 9,318校  
高等学校（中等教育学校後期課程を含む） 3,796校
  
- 調査項目：
  - I 小・中・高等学校等と「特別支援学校」の児童生徒の交流及び共同学習(学校間交流\*)の状況
  - II 小・中・高等学校等と「特別支援学校」の児童生徒の交流及び共同学習(居住地校交流\*)の状況
  - III 通常の学級と「特別支援学級」の児童生徒の交流及び共同学習の状況
  - IV 障害のある人との交流の状況（I～IIIを除き、大人の障害のある人との交流が対象。）

※ 全て、教育課程に位置づけられている活動を対象とする。

\* Iの「学校間交流」は、小・中・高等学校等と特別支援学校が学校間で連携して行う交流及び共同学習。

IIの「居住地校交流」は、小・中・高等学校等において、当該学校が所在する地域に居住する特別支援学校の児童生徒を受け入れて行う交流及び共同学習。

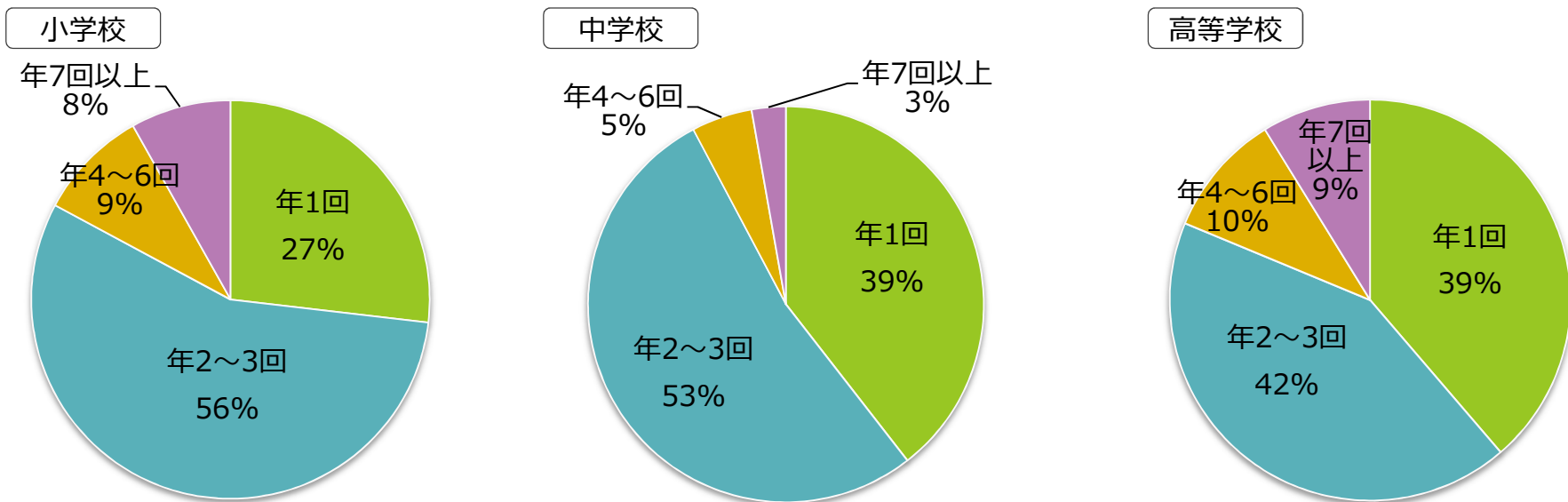
## 1 特別支援学校との交流及び共同学習（学校間交流）の実施状況

2～3割の学校が学校間交流を実施している。実施している学校のほとんどは毎年度継続的に実施している。

	小学校	中学校	高等学校
実施した	16%	18%	26%
うち、毎年度継続的に実施	15%	17%	25%
数年に一度実施	1%	1%	1%
実施していない	84%	82%	74%

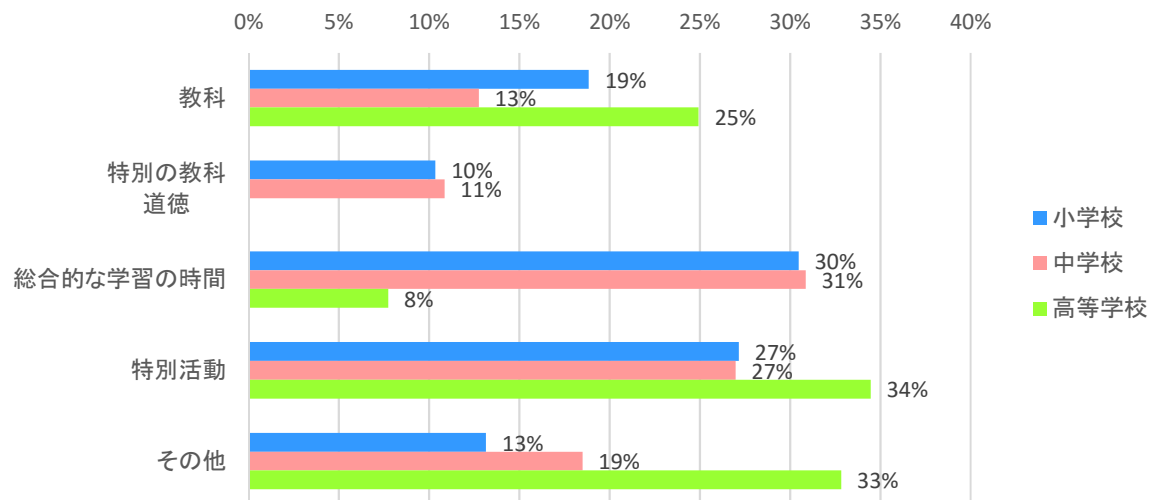
## 2 学校全体における年間の実施回数（1で「毎年度継続的に実施」と回答した学校のみ回答）

各学校段階とも、「年2～3回」が最も多く、次いで「年1回」となっている。



### 3 教育課程における位置付け（複数回答） （1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

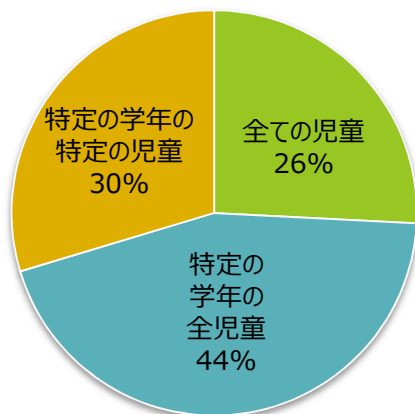
小・中学校では「総合的な学習の時間」に、高等学校では「特別活動」に位置付けている学校が最も多い。



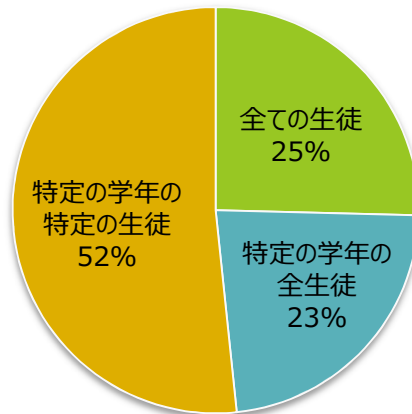
### 4 参加している児童生徒 （1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

学校段階が進むにつれて、参加している児童生徒の範囲が小さくなる傾向が見られる。

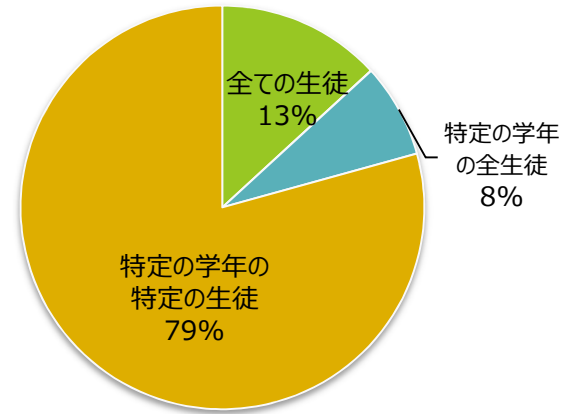
小学校



中学校

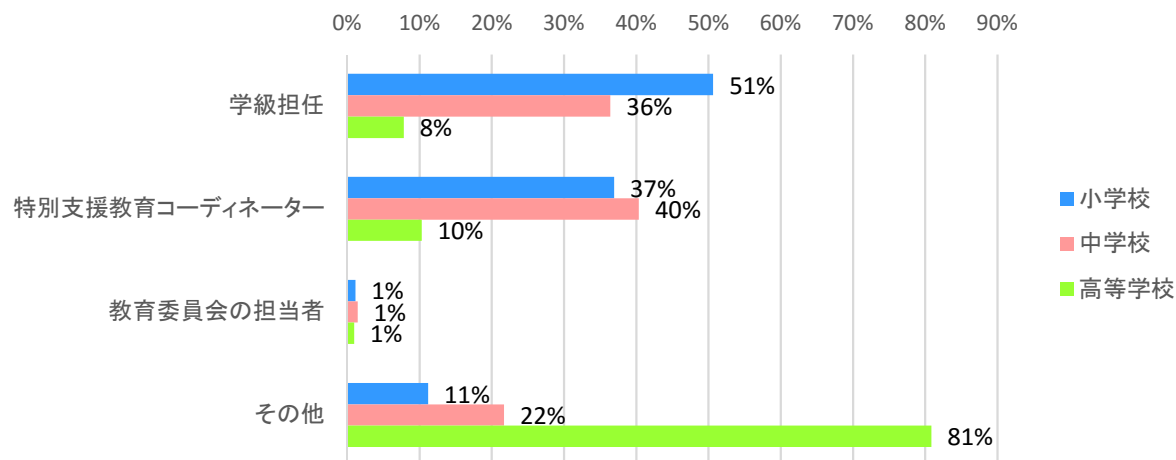


高等学校



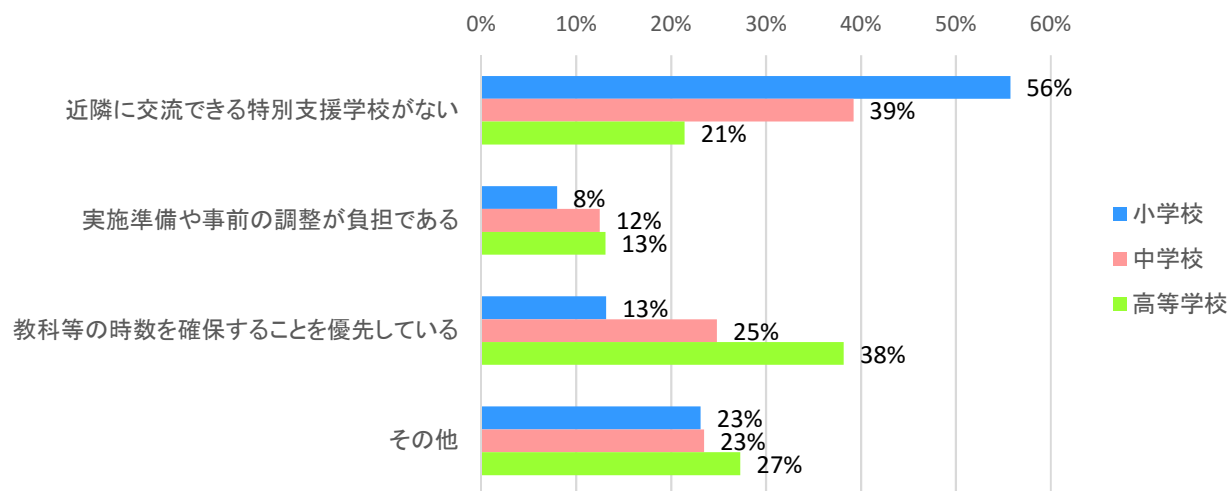
5 学校間交流の実施にあたり、特別支援学校との調整を行っている者（複数回答）（1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

小・中学校では「学級担任」又は「特別支援教育コーディネーター」と回答している学校が多い。



6 実施していない理由（複数回答）（1で「実施していない」と回答した学校のみ回答）

学校段階が進むと「教科等の時数を確保することを優先している」との回答が増え、高等学校では最も多くなっている。



### 1 特別支援学校との交流及び共同学習（居住地校交流）の実施状況

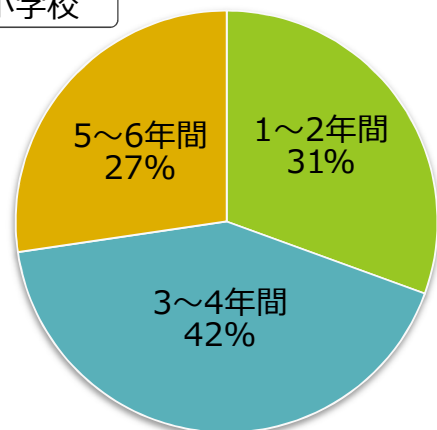
小・中学校では2～4割が実施しているが、高等学校段階になると大きく減少する。

	小学校	中学校	高等学校
実施した	37%	23%	4%
〔年間の受入人数〕			
うち、5名以下	34%	21%	2%
6名以上～10名以下	1%	0%	1%
11名以上～15名以下	2%	2%	0%
16名以上～20名以下	0%	0%	0%
21名以上	0%	0%	1%
実施していない	63%	77%	96%

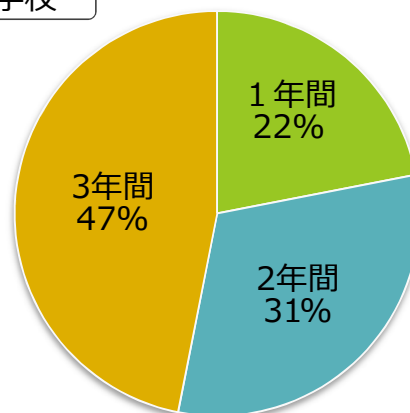
### 2 特別支援学校の児童生徒一人あたりの平均継続年数（1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

学校によって継続年数が異なっている状況が見られる。

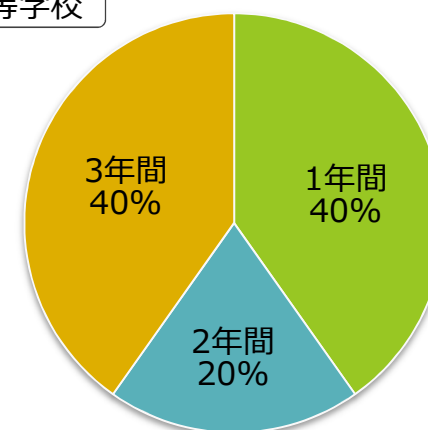
小学校



中学校

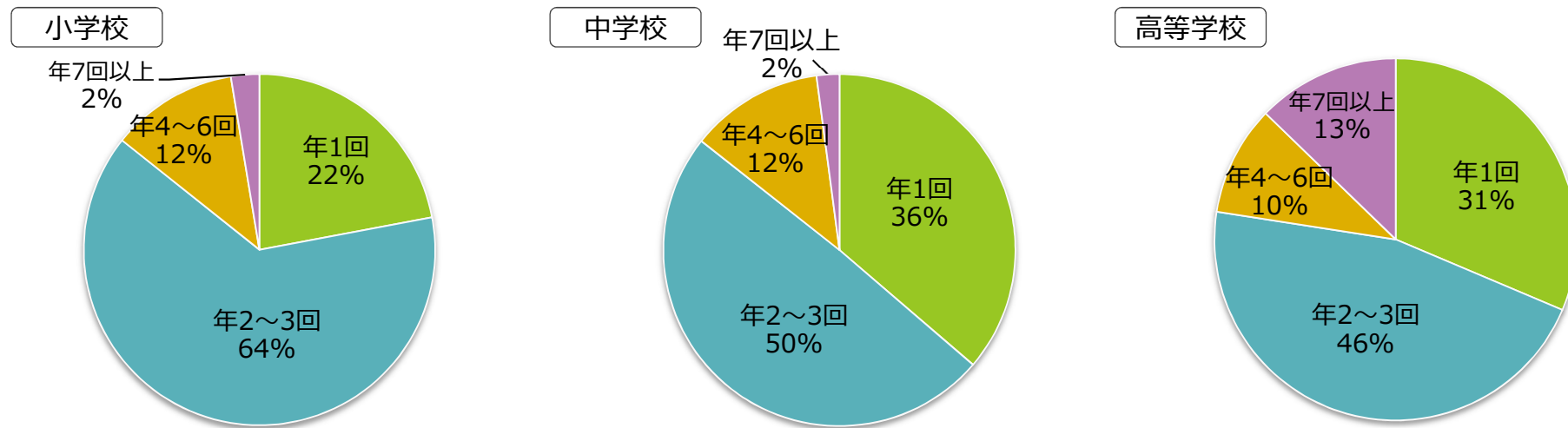


高等学校



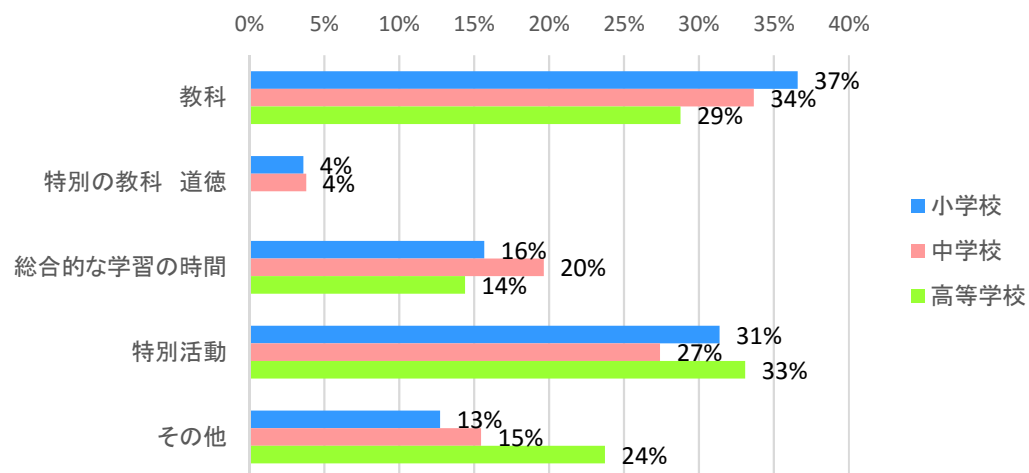
### 3 特別支援学校の児童生徒一人あたりの年間平均実施回数 (1で「実施した」と回答した学校のみ回答)

各学校段階とも、「年2～3回」が最も多く、次いで「年1回」となっている。



### 4 教育課程における位置付け (複数回答) (1で「実施した」と回答した学校のみ回答)

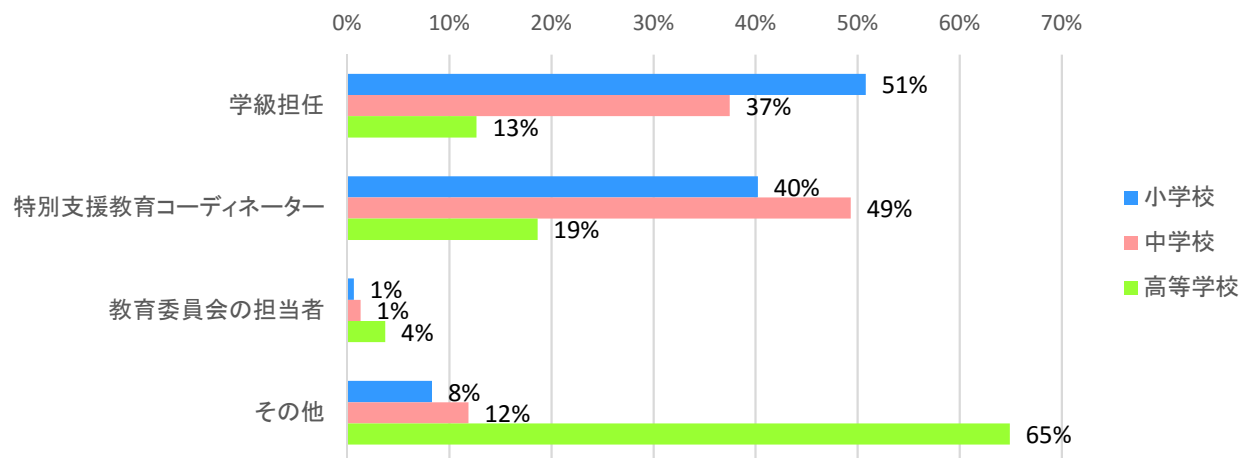
各学校段階とも、「教科」や「特別活動」において取り組んでいる学校が多い。



## II 居住地校交流

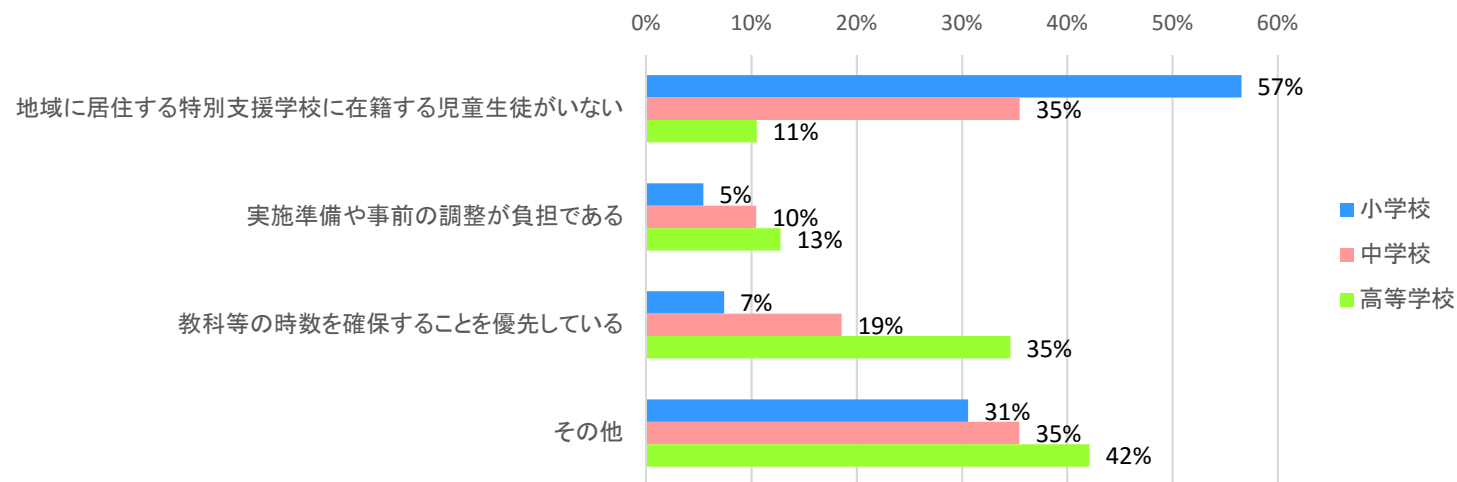
### 5 居住地校交流の実施にあたり、特別支援学校との調整を行っている者（複数回答）（1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

小・中学校では、「学級担任」又は「特別支援教育コーディネーター」と回答している学校が多い。



### 6 実施していない理由（複数回答）（1で「実施していない」と回答した学校のみ回答）

学校段階が進むと「教科等の時数を確保することを優先している」との回答が増え、高等学校では最も多くなっている。





### 1 特別支援学級と通常の学級の交流及び共同学習の実施状況

特別支援学級が設置されている学校のほとんどが実施しているが、実施していない学校も若干見られる。

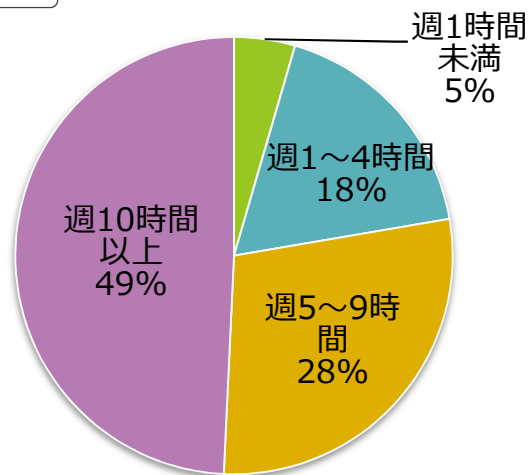
	小学校	中学校
実施した	81%	80%
うち、毎年度継続的に実施	81%	80%
数年に一度実施	0%	0%
実施していない	19%	20%

(注)本回答には、特別支援学級が設置されていない小学校（17%）、中学校（17%）が含まれる。

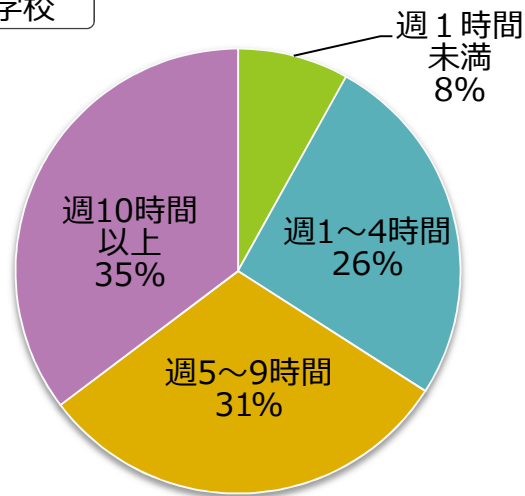
### 2 特別支援学級の児童生徒一人あたりの週の平均実施時間数 （1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

小・中学校とも「週10時間以上」と回答した学校が最も多い。

小学校

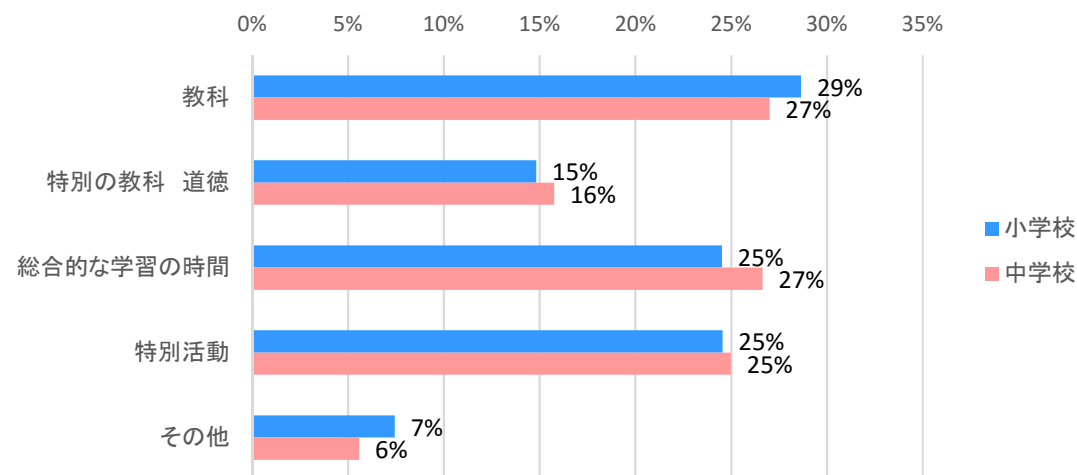


中学校



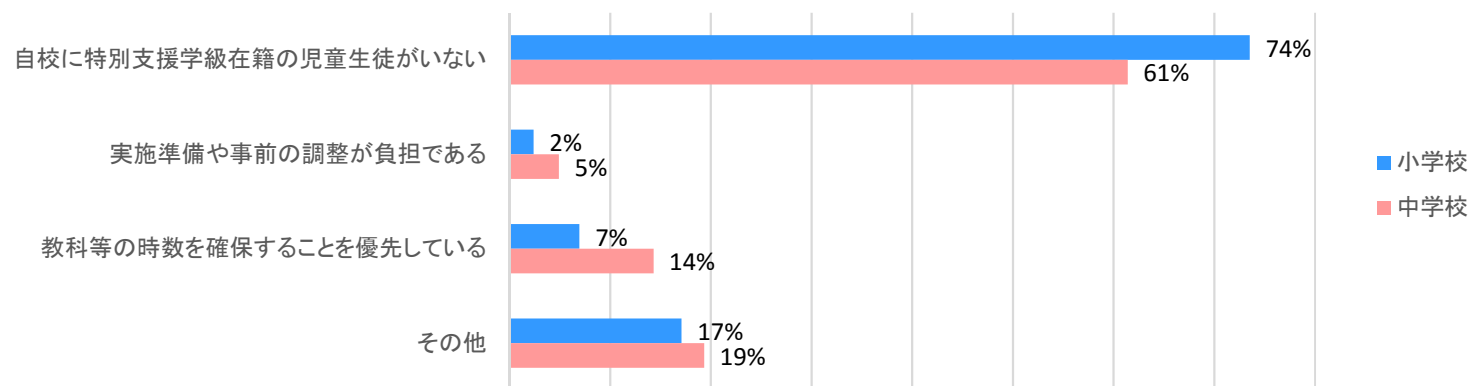
### 3 教育課程における位置付け（複数回答） （1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

様々な時間を活用して実施している状況が見られる。



### 4 実施していない理由（複数回答） （1で「実施していない」と回答した学校のみ回答）

学校段階が進むと「教科等の時数を確保することを優先している」との回答が多くなる状況が見られる。



## 1 障害のある人との交流活動の実施状況

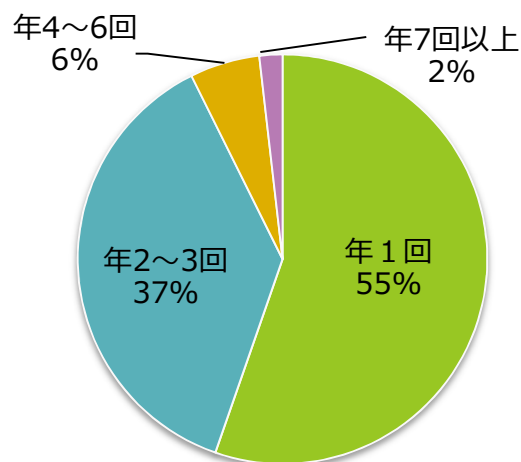
2～4割の学校が実施している。学校段階が進むにつれて実施している学校の割合が減少傾向にある。

	小学校	中学校	高等学校
実施した	40%	29%	21%
うち、毎年度継続的に実施	34%	24%	18%
数年に一度実施	6%	5%	3%
実施していない	60%	71%	79%

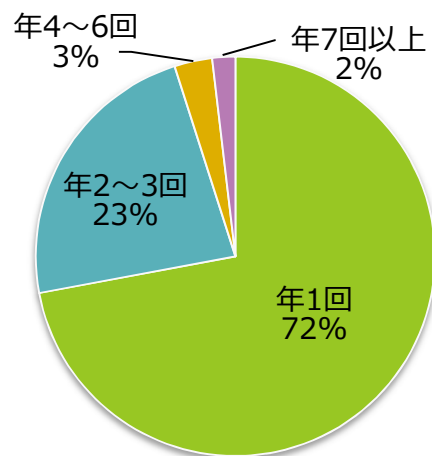
## 2 学校全体における年間の実施回数 (1で「毎年度継続的に実施」と回答した学校のみ回答)

各学校段階とも、「年1回」と回答した学校の割合が多い。

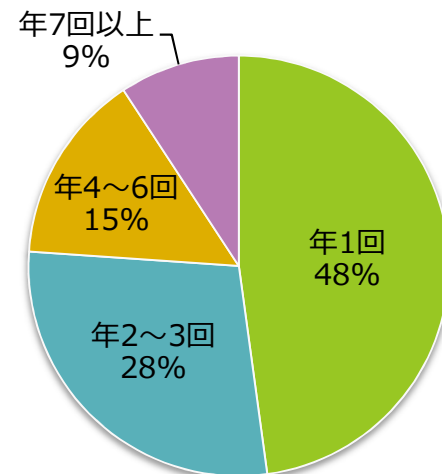
小学校



中学校

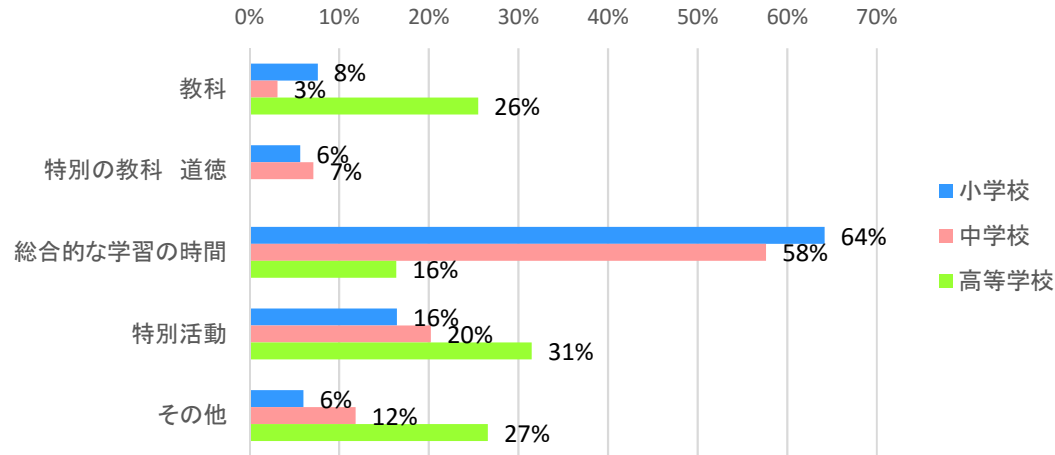


高等学校



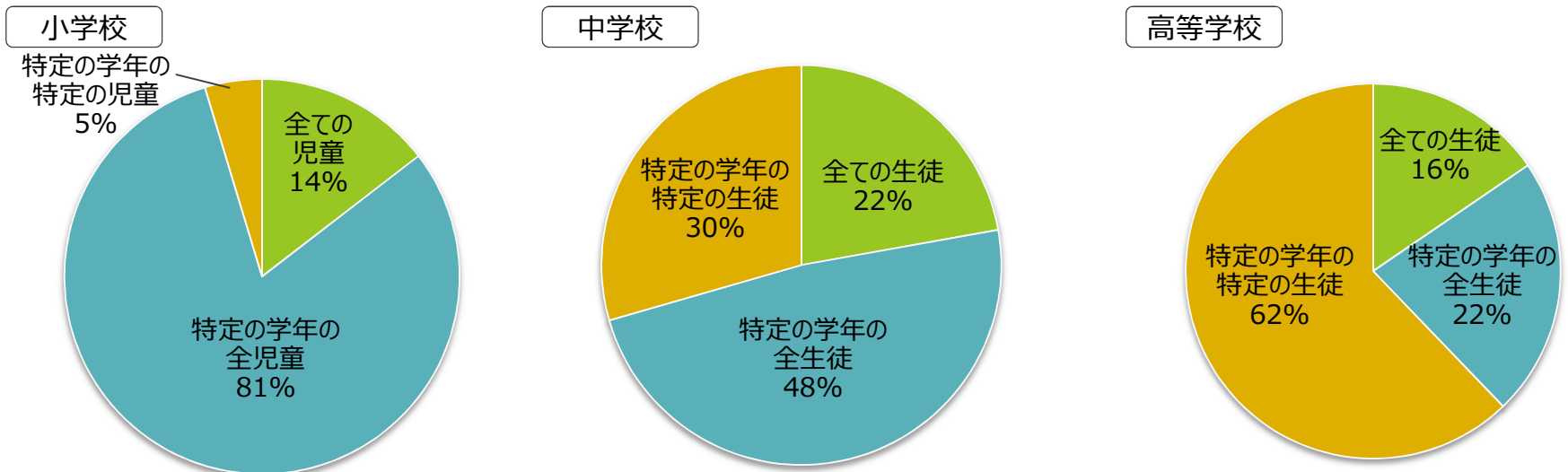
### 3 教育課程における位置付け（複数回答） （1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

小・中学校では「総合的な学習の時間」に、高等学校では「特別活動」に位置付けている学校が最も多い。



### 4 参加している児童生徒 （1で「実施した」と回答した学校のみ回答）

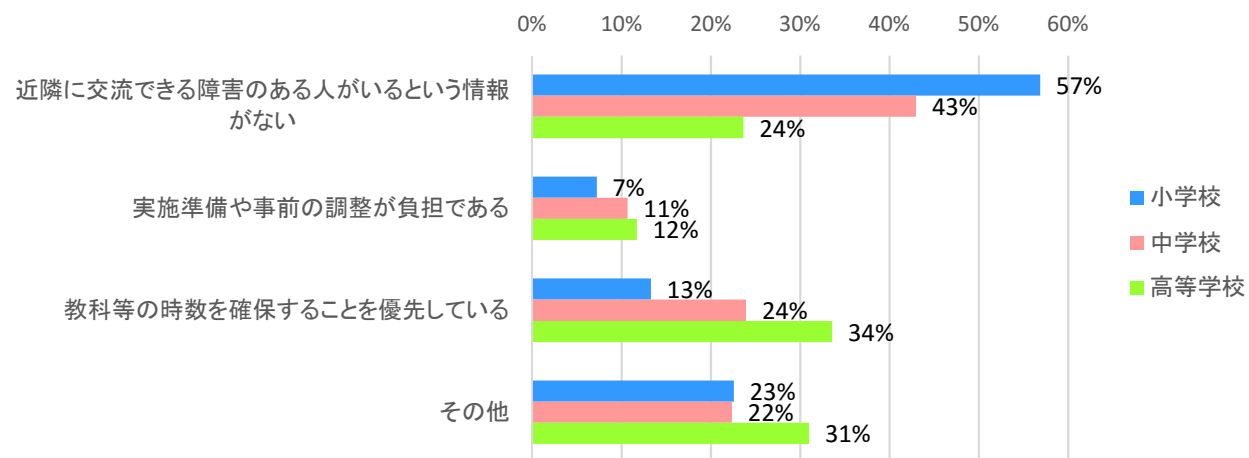
小・中学校では「特定の学年の全児童生徒」、高等学校では「特定の学年の特定の生徒」と回答している学校が最も多い。



## IV 障害のある人との交流

### 5 実施していない理由（複数回答）（1で「実施していない」と回答した学校のみ回答）

小・中学校では情報が無いこと、高等学校では教科等の時数の確保を理由に挙げている学校が最も多い。



## 〔再掲〕全体の実施状況

### ◆ それぞれの回答に「実施した」と回答した学校の割合

	小学校	中学校	高等学校
学校間交流	16%	18%	26%
居住地校交流	37%	23%	4%
特別支援学級との交流 *	81%	80%	—
障害のある人の交流	40%	29%	21%

\* 回答には、特別支援学級が設置されていない小学校（17%）、中学校（17%）が含まれる。